同時対比の法則

新印象派からオプ・アートまで

Simultaneous Contrast: From Neo-Impressionism to Op Art

2024/6/19（Wed）15:00-17:00

東京大学駒場Iキャンパス 18号館４階コラボレーションルーム1

University of Tokyo, Komaba Campus I (Build. 18, 4F, Collaboration room 1)

講演者：Pr. Pepe Karmel（New York University）

司会：松井 裕美（東京大学）

概要：印象派の絵画に認められる点描と、対照的な色相の並置の強調は、印象派絵画とは異なる様式を生み出した。新印象派の手法は、キュビスムの画家ロベール・ドローネとソニア・ドローネーの「同時的」絵画や、ヴィクトル・ヴァザルリ、リチャード・アヌスキェヴィッチ、ジュリアン・スタンチャックといった芸術家による抽象的なオプ・アートにも継承されることになる。オプ・アートの制作に携わった者たちが、ゲシュタルト心理学についての知識を利用したことも重要である。こうした心理学的な概念と芸術概念の結合は、視覚に関する神経学の分野での近年の研究と、どの程度一致しているのだろうか。新印象派の構図は、人物や物体を平面的なシルエットに縮小し、個々の形態を均質な視覚野の経験に従属させた。構図の対称性と質感の均質性は、特に1880年代後半のジョルジュ・スーラとポール・シニャックの作品に顕著である。ドローネーの「オルフィスム」は、異なるソース（具体的には、ビザンチンのモザイクの色彩と、分析的キュビスムの幾何学的格子）に由来するものの、ほぼ均質な視覚野を全体として強調する点では類似している。オプ・アートはまた、ミニマリズムと結びつけられることの多い、対称性と反復への強い傾向も示した。本講演では、現代美術においてこうした傾向が繰り返された要因を考察する。

講演者について：ニューヨーク大学美術史学科教授。主著に『Picasso and the Invention of Cubism』（Yale University Press, 2003）、『Abstract Art: A Global History』（Thames & Hudson, 2020）、『Looking at Picasso』（Thames & Hudson, 2023）。監修した展覧会に、「Robert Morris: Felt Works」展（Grey Art Gallery, New York University, 1989）、ジャクソン・ポロック回顧展（MoMA, 1998）、「The Age of Picasso: Gifts to American Museums」（Rome and Santander, 2004）、「New York Cool: Painting and Sculpture from the NYU Collection」（Grey Art Gallery, New York University [他4会場], 2008-2009）、「Conceptual Abstraction」（Hunter College / Times Square Gallery, 2012）など。

主催：東京大学若手研究者育成支援制度　共催：東京大学芸術創造連携研究機構

助成：鹿島美術財団

言語：英語（逐語通訳あり）

問い合わせ：松井裕美（hiromimatsui[a]g.ecc.u-tokyo.ac.jp）/〒153－0041 東京都目黒区駒場３－８－１